

## 157. 八日市市十禅谷古窯跡

### 出土の緑釉陶器について

#### 1. はじめに

八日市市土器町十禅谷古窯跡出土の緑釉陶器については、既に、世界陶磁全集に藤岡一による報文<sup>①</sup>があり、近年では八日市市史に丸山竜平による紹介<sup>②</sup>がなされており、本文は多分に蛇足ではあるが、近江の緑釉陶器について考察する場合等関視出来ぬ資料であるため、敢えて一文を為さんとするものではある。本資料は現在、京都国立博物館に保管されており、本文の実測図等は同所に於いて作成したものである。以下、その内容について簡明に記述し、他の近江型緑釉陶器との比較を行い、本資料の位置について考察を加えてみよう。

なお、本古窯跡は琵琶湖東岸の内陸部に立地し、かつ鏡古窯跡群につづく近江の須恵器の一大生産地であった布引丘陵の一角にあたる。つまり近江の古代窯業



1 図 遺跡位置図(25,000分の1)

の中心部にこそ形成されている。

#### 2. その特徴について

**施釉** 資料のうち緑釉が実際に施されているのは1例(No.26)で、緑釉がみえるもの(No.4、13、20、21、30、33)についてはその全てが色見として施されているものである。その色調はこれまで近江産と呼ばれている緑釉と同一の、やや深く暗い緑色である。

**焼成・胎土** その多くが所謂、軟陶なのであるが、窯跡の廃棄品である事や廃棄品の全てでない事などを勘案すれば、ただちに本窯跡では軟陶の製品を主として供給していたと言えぬ事は論を俟たない。その使われている胎土は他の近江型緑釉陶器と同様、小砂を含み肌目細かい粘土を使用している。

**器種・形態** 器種としては埴、皿、三脚付盤、壺の他、窯道具としての三ツ又トナがある。これらのうち、埴・皿類は、限られた資料ながら、その形態や大きさである程度分別が可能である。以下、その形態について聊か詳しく記述してみよう。

まず、埴はその法量で二種に大別出来る。小型の埴(No.3、4、5、6、7、15)は径11~13cm前後で高台径6cm前後。体部は球形に近い深い形態であり、口縁部はやや外反し、その端部を丸く収める。また、No.3の埴は口縁内面に沈線を施している。高台の形態は、そのやや高いものでは直立気味で端部をやや内彎気味にするもの(No.5)と直線的に外傾させるもの(No.6、7)があり、さらにやや低く、三日月高台に類するもの(No.4、15)がある。これらの埴は例外なく高台の向地面に凹線を付すか、もしくはへらによるアテを行いそれを表わしている。また、器の内底に一周する凹線を施すもの(No.4、6)と施さぬもの(No.5、7、15は不明)とがある。大型の埴は小型の埴と同様の形態だが、径が15~19cmと大振りで、腰部が著しく丸く張り結果的に口縁部にかけての立ち上りが余り外側に開かず、球形に近い深みのある形態となるものと、腰部が余り張らず、口縁部にかけてやや開き気味に立ち上る、やや浅めの印象のもの二種がある。この二種に分ける事が妥当かは、本観察対象の陶器が小破片であり個体中の変異をそのまま記述した可能性もあり、やや不安定な要素もあるが、恐らく妥当であろうと思われる。この点については別稿にて記述する。また、No.20は口唇内面に沈線を施す。その高台は薄手と厚手

とがあり、それらは、やや高く径9cm前後の直立気味で端部が内彎するもの(No.18、19、24)と径8cm前後で低く厚手のもの(No.25、26、33)の三種がある。その底部は平坦で厚手が主流だが、薄手で中央に向けて垂下するものもある。それらは内底に一周する凹線を施すもの(No.16、24、25、31、33)と施さぬもの(No.17、18、19、22、26、不明No.20、22、23、30)がある。輪花埴(No.21)は実測図では開き方の少ない、極めて深い形態にみえるが本来は他の深いタイプの大型の埴と同様の形態なのであろう、その輪花は4個でやや長く、外面はへら、内面は両サイドをユビナデで表現している。

皿類は高台付のものと同高台のもの二種類がある。高台付皿は径12cm前後で、体部の若干の相異で二類に分類できよう。一は体部がやや直線的に開き内面の底部付近に凹線が付される(No.1、11)。他は腰部に丸みのある器形で、体部内面中程に凹線が付されるもの(No.10、不明No.13、14)である。いずれも口縁部はやや外反し、端部は丸く取められている。高台は低く外方に踏ん張る形で、向地面に凹線を設けるものである。No.12は稜皿となる可能性がある。また、無高台の皿(No.2)は底部が厚く、体部は直線的に開く形で、口縁部は外反し、端部はやや尖る形に取める。あるいはこれは耳皿かも知れない。

他の三脚付盤、壺類はいずれもその一部が出土したのみで全体の形は明らかではない。盤の脚は獸脚であり、多分、獅子脚形であろう。

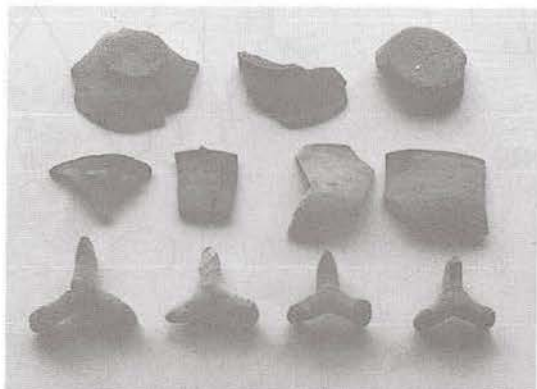
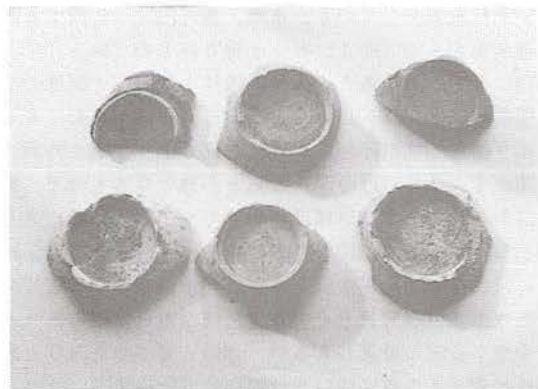
**技法** 横ナデ調整が基本で、削り手法は認められない。底部の切り離しは回転糸切り法を用いており、その痕跡をナデで消すもの、消さないもの両者がある。これらの陶器は素地焼成の際は直接、器どうしを重ねて焼成し、緑釉施釉後の焼成には三ツ又トチを用いて釉による焼着を防いでいる。緑釉の施釉は器の外面底部にも施す全面施釉である。この緑釉施釉の際の窯道具としての三ツ又トチが得られており、それは三ツ又

の先、端部を楔形に平らにのぼす、器との接地部を極小とする為の形態のものである。

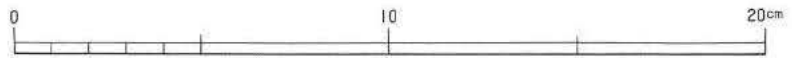
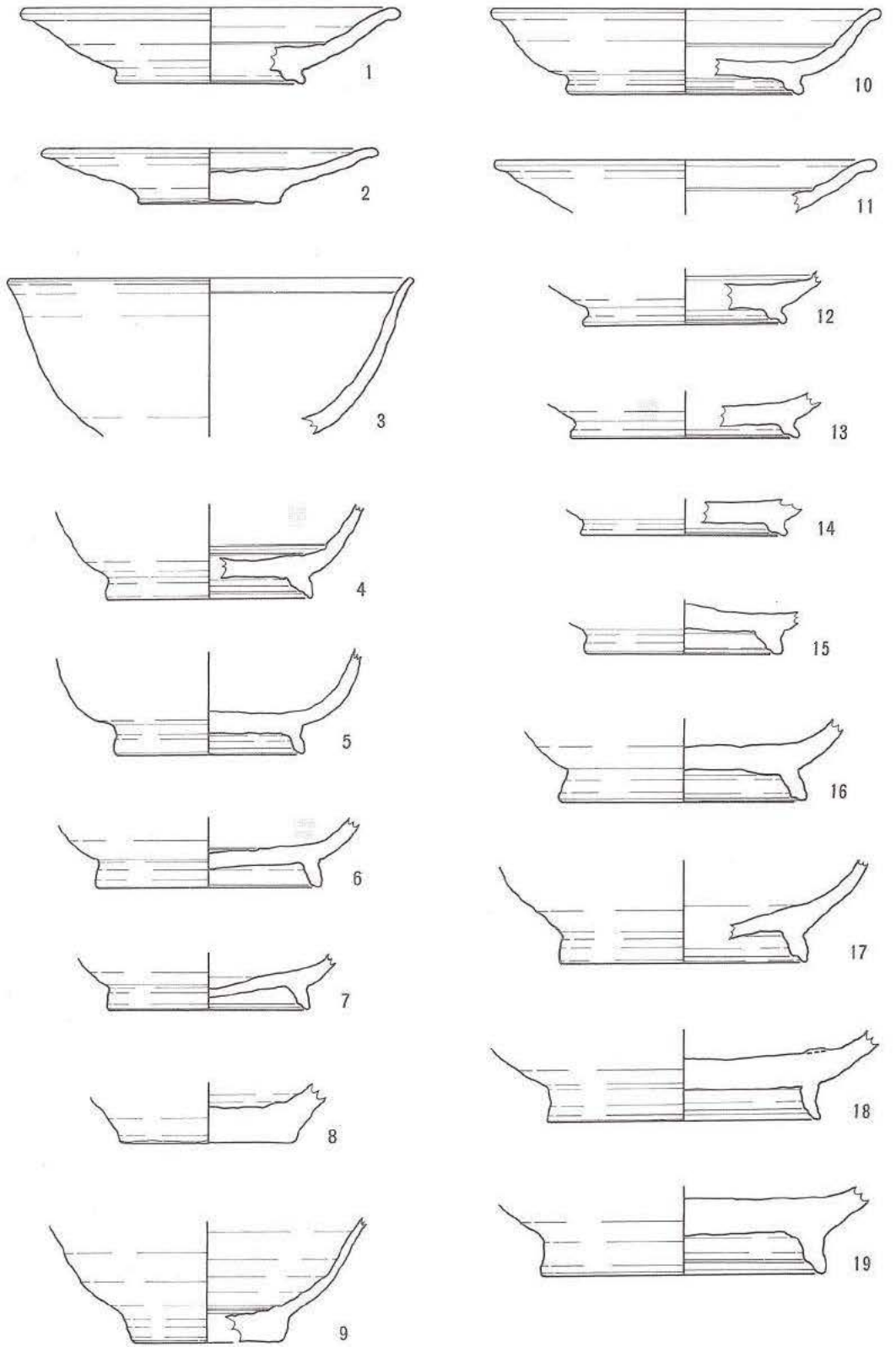
### 3. 本資料の位置について

この項では近江における緑釉陶器の中の本資料の占める位置について、相対的に検証する事を主な目標とし、絶体的な位置については別稿にて検証する。本資料の位置について検討するにあたって、近江型緑釉陶器は近江内外を問わず多くの資料が存在するが、ここでは近江内の生産跡・窯跡出土の資料を比較の対象とする。それは、例えば、美濃の緑釉陶器に近江産緑釉陶器と同様の形態、手法の製品が存在し、消費地出土資料での混濁を恐れるからであり、また、近江内の生産跡が湖東南部に限定されると推測しているが故である。本資料以外の窯跡の資料としては水口町春日山の神窯跡<sup>(7)</sup>、同春日峯道窯跡<sup>(8)</sup>、日野町作谷窯跡<sup>(9)</sup>がある。それらについては「近江出土の施釉陶器」に図を掲載している<sup>(6)</sup>。十禅谷窯跡例以外の番号は同図録中のものである。本資料も含めてそこで出土している緑釉陶器、その素地陶器あるいは須恵質陶器のうち、共通の資料としては埴・皿類があり、本項でもその埴・皿類を通して比較検討を行う。

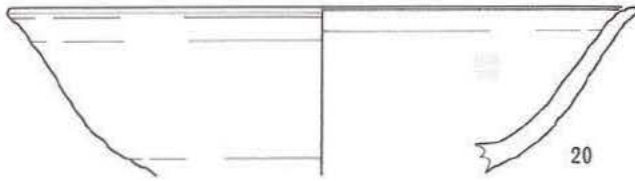
これらの陶器を一覧するに、その体部、口縁部の形態は略々同一で、例えば、埴は深い埴形を基本とし、腰部のややそげた、やや浅めの印象の埴と腰部が深く屈曲し、やや深い、球形に近い印象のもの二種であり、口縁部は共通して外反させ端部は丸く取めている。こと体部に関しては一定の作成上の規範が存在していることを窺わせる。これらの窯跡出土の各種資料の大きな相異はその高台の形態にある。概念的に埴類の高台の形態をまとめてみると、薄手で高いもの(作谷、峯道、山の神)、やや厚手で高いもの(山の神、作谷)、厚手で低く踏ん張るもの(峯道)の三種に大別出来る。これらの種別が各窯跡の個別的成形の差異でない事は緑釉陶器自体が持つ性格の他、例えば、それらの要素が各窯跡出土の陶器に複合して存在する事からも明ら



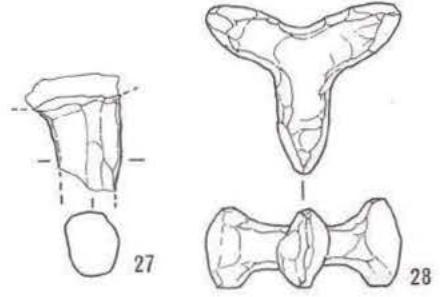
十 禅 谷 出 土 品



2図 実測図

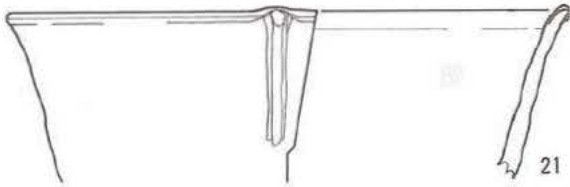


20

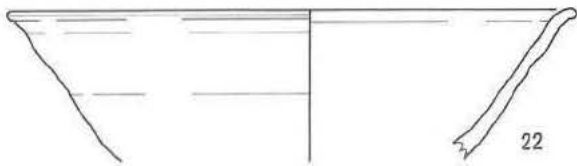


27

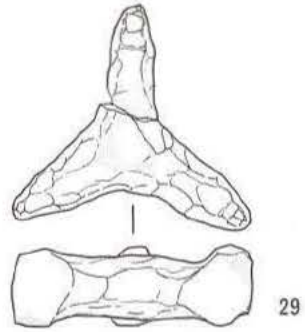
28



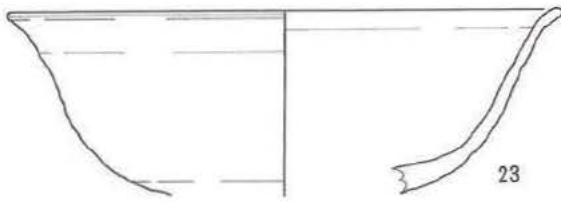
21



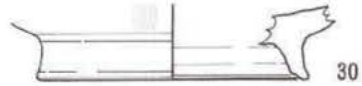
22



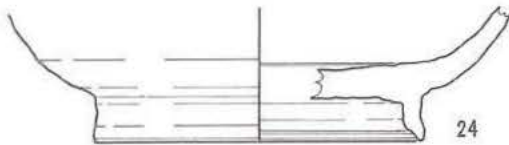
29



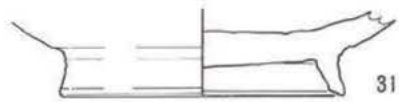
23



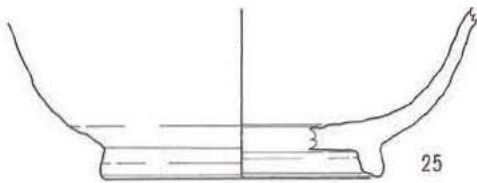
30



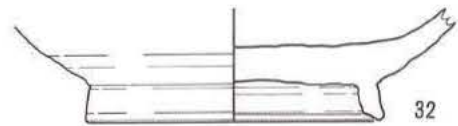
24



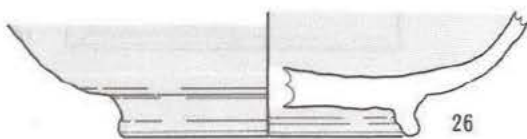
31



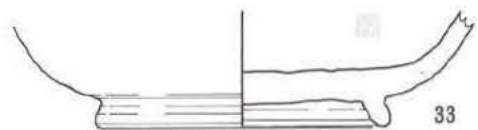
25



32

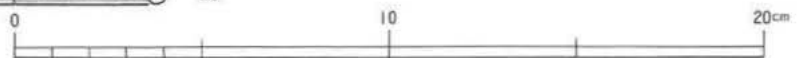


26



33

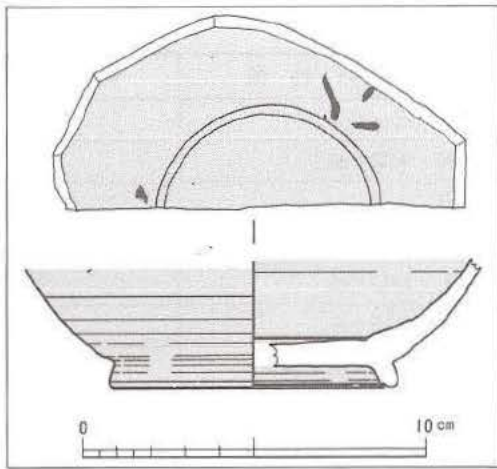
(スクリーントーンは色見の施されているもの、緑釉の付着するもの)



3図 実測図

陶器観察表

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	皿	・厚手の低い貼付高台・内底に凹線	・硬陶・三ッ又トチ	
2	皿	・無高台	・硬陶・糸切り痕	
3	埴	・深い埴形・口唇内面に沈線	・硬陶	
4	埴	・厚手の三角形高台・内面に二重の沈線	・硬陶・三ッ又トチ	・色見
5	埴	・深い埴形高台は薄手でやや高い	・硬陶・糸切り痕	
6	埴	・高台は高く直線的・内底に凹線	・硬陶・糸切り痕	
7	埴	・高台はやや高い	・軟陶・糸切り痕を消す	
8	壺		・軟陶・内部の調整痕顕著	
9	壺か		・軟陶・内部の調整痕顕著	
10	皿	・低い貼り付け高台・内底に凹線	・軟陶・糸切り痕	
11	皿	・直線的に開く体部・内面下部に凹線	・軟陶	
12	皿	・低い貼り付け高台	・軟陶	・稜皿か
13	皿	・薄手の低い貼り付け高台	・硬陶・糸切り痕	・色見
14	皿	・厚手の低い貼り付け高台	・軟陶・糸切り痕を消す	
15	埴	・やや高い高台・内底中央が盛り上る	・軟陶	
16	埴	・大型・高台は厚手で高い・内底に凹線		
17	埴	・大型・高台はやや高く内彎気味	・軟陶・糸切り痕	
18	埴	・大型・底部肉厚 ・高台はやや高く薄手で外反気味	・軟陶・糸切り痕	・内底に降下物
19	埴	・大型・底部高台とも肉厚	・軟陶・糸切り痕を消す	
20	埴	・大型・やや浅めの埴・口唇内面に沈線	・軟陶	・色見
21	輪花埴	・大型で深い埴形	・硬陶・輪花はへらで表現	・色見
22	埴	・大型でやや浅い埴	・軟陶	
23	埴	・大型で深い埴形	・軟陶	
24	埴	・大型・高台は高く直立気味 ・内底に凹線	・軟陶・糸切り痕を消す	
25	埴	・深い埴形・高台は肉厚で低い ・内底に凹線	・軟陶・糸切り痕を消す	
26	緑釉埴	・大型で深形・高台は低い	・軟陶・糸切り痕・三ッ又トチ	・深緑の釉
27	三脚盤	・獣脚	・軟陶	
28	三ッ又トチ	・縁部は平らにのぼし、接地部を小さくする	・土師質・指ナテで整形	・端部に緑釉つく
29	三ッ又トチ	・縁部は平らにのぼし、接地部を小さくする	・土師質・指ナテで整形	・端部と中央部に緑釉つく
30	埴	・高台は薄手で高い	・軟陶	・色見
31	埴	・高台は薄手で高い・内底に凹線 ・底部肉厚	・軟陶・糸切り痕	
32	埴	・大型・内底に凹線	・軟陶・中央部に糸切り痕残る	
33	埴	・大型・内底に凹線	・硬陶・糸切り痕・三ッ又トチ	・色見



近江国衙出土 白釉二彩陶器

かである。従って、それらの要素は時間的な差異の結果として捉えられよう。十禪谷窯跡の資料は他の窯跡のそれと比較するに明確な相異があり、明らかに同一の地平の存在ではない。それは、例えば、No.16、22の高く直線的に開く高台であり、No.25の低い高台であり、また、No.24の高く薄手で直立気味の高台である。No.16、22の高台に類似するものとしては山の神古窯跡のNo.547が挙げられ、No.24の高台には山の神、作谷古窯跡例のNo.461、No.527があり、また峯道古窯跡のNo.644もその系列に入るものであろう。No.25の厚手で低い例は他に類例がないように思われる。以上の高台の形態を比較して明らかなことは他の窯跡出土資料が本十禪谷窯跡例に比して形式化が進んでおり、相対的に新しいと見做される点である。これは峯道窯跡出土資料の厚手で低く、外方に踏ん張る形、つまり、より後出するタイプのものが本窯跡例中には勿論、山の神、作谷窯跡例にない事、そして、薄手で高く直立気味の高台が峯道、山の神、作谷窯跡に共通して製作されている事を前提としてそれら各窯跡出土資料が時間的に継続して製作されている事を肯じ得るならば、山の神、作谷窯跡の緑釉陶器がこの十禪谷古窯跡資料に後出するものである事を証することが出来るであろう。つまり、現時点での近江の窯跡出土、生産跡の例としてはこの十禪谷窯跡の緑釉陶器が近江のその最古の段階のものとして位置づけられるのであろう。これは例えば、本十禪谷古窯跡の緑釉陶器が愛知川町畑田廃寺遺跡、蒲生町宮井野瀬遺跡、あるいは近江八幡市西ノ庄遺跡など古手の緑釉陶器を出土する遺跡で確認されている点や、峯道窯跡例がより新しい近江町法勝寺遺跡で出土する点をその例証として挙げればその検証には足りよう。因みに近江町法勝寺遺跡では二手の緑釉陶器が一括して出土している。そのうち高台に凹線を設けるもの（No.140、No.150）は峯道窯跡の製品であり、凹線を設け

ない三角形の高台の緑釉陶器（No.141）は同窯跡では焼成されておらず、各地出土の同形態の緑釉陶器の伴出陶器からみてより後出の緑釉陶器であり、それは法勝寺遺跡でそれらの緑釉陶器と一括出土している土師器の年代に符合する。前述した如く、峯道古窯跡ではこれらの二種の緑釉陶器は混在して焼成されておらず、高台に向地面をつくりそこに凹線を付すタイプのみを焼成している点から、峯道窯跡での主たる製品である低く厚手の高台で、それがひしゃげたタイプの緑釉陶器は、高台に向地面をつくらず断面が三角形を呈する、しばしば底部内面が無釉である緑釉陶器に先行するものであるといえる。

#### 4. まとめ

かように、本十禪谷窯跡の緑釉陶器の近江における生産跡での相対的な位置について観察し、推定を加えてきたが、それはこの資料が他の山の神、作谷、峯道窯跡の製品に先行する緑釉陶器であり、この十禪谷タイプの諸特徴からみて十禪谷窯式として捉え得るもので、近江の緑釉陶器中の古段階の形式として位置づけられよう。

また、先述した如く本窯跡の営まれた布引丘陵は近江内の中心的な窯業地の一であり、かような緑釉陶器窯が営まれるに十分な資質が、人的な面や陶土等の要素の他、交通等を含む物流の面などに於いて備わっていたことが指摘出来よう。以上、十禪谷窯跡出土緑釉陶器の諸特徴を挙げてきたが、なお、その性格等、言及せねばならぬ内容が多々あるが、それらについては別稿にて語る事とする。（松澤 修）

#### 註

- ① 藤岡了一 「奈良・平安時代の施釉陶」（『世界陶磁全集』2 1957）
- ② 丸山竜平（『八日市市史』1）
- ③ その観察にあたっては、同館考古室長森郁夫氏に多大な御尽力をいただいた。記して深謝したい。
- ④ 「近江型」緑釉陶器の概念については別稿を用意している。
- ⑤ 例えば、大原9号窯跡例や北丘15号窯跡例。
- ⑥ 下記の例の他、栗東町道久谷遺跡の出土例に別の窯跡の可能性の緑釉あるいは素地陶があり、同遺跡付近に緑釉陶の窯跡が存在する可能性がある。
- ⑦ 山口利彦、丸山竜平 「春日山の神古窯跡」（『滋賀県文化財調査年報』1973）
- ⑧ 拙稿「峯道古窯跡出土緑釉陶の紹介」（『滋賀県文化財』より39号）1980.6）
- ⑨ 日永伊久男 「金折山窯跡」（『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』1986）
- ⑩ 滋賀県立近江風土記の丘資料館 『近江出土の施釉陶器』（1988）